

公表用論文要約

カマラシーラの無自性性論証研究

林 玄海

あらゆるものは空 (*sūnya*) であるという見解を思想の中心に据える中観派 (*Mādhyamika*) は、ナーガールジュナ (*Nāgārjuna*, ca. 150–250) の主著『中論』 (*Mūlamadhyamakakārikā*) における思想をその源流とする。そして、ナーガールジュナ以後、論理的な手法を取り込みながら、様々な形ですべての存在が空であること、すなわち無自性であることを論証する。8世紀頃になると、それらの無自性性論証を整理しようとする傾向が見られる。カマラシーラ (*Kamalaśīla*, ca. 740–795) もそのひとりとされ、主著『中観光明論』 (*Madhyamakāloka*) において、無自性性論証を以下の5つに整理したとされる。それは、「自身と他者と自他の両者と無原因から生起しないことを証因とする論証」(以下「金剛片」と「有と無が生起しないことを証因とする論証」(以下「破有無生」と「単一の原因から単一の結果が、単一の原因から複数の結果が、複数の原因から単一の結果が、複数の原因から複数の結果が生起しないことを証因とする論証」(以下「破四句生」と「諸存在が縁起しているものであることを証因とする論証」(以下「縁起」と「諸存在が単一の自性も複数の自性も持たないことを証因とする論証」(以下「離一多」)である。しかしながら、カマラシーラ自身は、無自性性論証をいくつにまとめたのか、あるいは各無自性性論証がどのような関係にあるのかについて、必ずしも明確に言及するわけではない。そのため、カマラシーラの中観思想を明らかにするためには、彼の著作を精査したうえで、カマラシーラの無自性性論証を読み解く必要がある。

カマラシーラの中観思想を知るうえで重要なテキストは、『中観光明論』を含めいくつか現存しているが、その中で、『真実光明論』 (*Tattvāloka*) のみが研究を十分に進められているとは言い難い。カマラシーラの中観思想を明らかにするためには、カマラシーラの中観思想が見られる論書を網羅的に検討する必要がある、その点で、『真実光明論』を扱うことには大きな意味がある。

本論文は、以上のような状況を踏まえ、『真実光明論』を解説したうえで、カマラシーラの中観論書を包括的に扱い、カマラシーラの中観思想を明らかにすることを目的としている。

本論文は、全部で5つの章から成る。第1章では、カマラシーラの無自性性論証並びに著作を扱った先行研究をまとめたうえで問題点があることを指摘し、それをもとに第2章以降で議論を進める。カマラシーラの無自性性論証を扱う先行研究に関する問題点の中で、本論文で扱うものは、カマラシーラの二段階の論証の理解に不十分な点のあること、5つの無自性性論証の中の「破有無生」の位置付けに問題があること、そして「勝義の点で」

(paramārthatas) という限定句（以下「限定句」）の解釈が明確にされていないという 3 点である。そして、以上の問題点を扱う前提として、カマラシーラの各著作の内容及び研究状況を概観し、カマラシーラが無自性論証を扱う著作の中で、『真実光明論』以外の著作については、テキスト研究及び思想研究が進められていることを確認した。

第 2 章では、『真実光明論』がどのような著作であるのかを明らかにした。はじめに『真実光明論』について言及する先行研究について取り上げ、『真実光明論』の研究状況を確認した。そして、カマラシーラが無自性論証を扱う著作の中で、『真実光明論』のみがテキスト研究と思想研究ともに研究を十分に進められていないという現状を確認した。次に、『真実光明論』のシノプシスを示したうえで、その内容と構造について概観した。さらに、『真実光明論』と、『中観光明論』『一切法無自性成就』(**Sarvadharmāṅīḥsvabhāvasiddhi*) という三著作間の関係をまとめ、理証と二諦説の内容については、『真実光明論』が『中観光明論』の略本にあたることを指摘した。さらに、『真実光明論』に特徴的な議論を、『中観光明論』にも見られるがその内容が異なる議論と、『中観光明論』では内容的に扱われていない議論とに分けて示した。以上の考察により、『真実光明論』は、基本的には『中観光明論』の理証による無自性論証の検討と二諦説を取り上げた略本として位置付けられるが、『中観光明論』の内容をそのまま要略したものではなく、『真実光明論』自体で展開する議論も見られる著作であることを明らかにした。そこから、カマラシーラの中観思想を明らかにするうえで、『真実光明論』を扱う必要のあることを指摘した。

第 3 章では、問題点の 3 点目である「限定句」の解釈、並びにその前提となるカマラシーラの二諦説について扱った。まず、カマラシーラの設定する二諦説について、戯論を離れた第一義的な勝義に何が位置付けられるのかを検討した。第一義的な勝義の対象には、Karmadhāraya 複合語解釈と Tatpuruṣa 複合語解釈の 2 つの複合語解釈を通して説明される「法無我と人無我という特徴を本質とする真実」が該当する。そして、第一義的な勝義の智慧として仏や菩薩の出世間智、一切智者の智慧、世尊たちの瑜伽行者の直接知覚が挙げられる。次に、「限定句」との関連が指摘される正智 (*saṃyagjñāna*) について取り上げたうえで、カマラシーラが「限定句」をどのように解釈するかについて検討した。正智は、聞思修より成る般若という第二義的な勝義とは別に、戯論を離れた出世間智や一切相智者の智慧という第一義的な勝義としても見られることを指摘した。さらに、「限定句」の理解について、カマラシーラは「真実として吟味するなら」という対象の側面と、「正智〔の意図〕で」という主体の側面という 2 つの観点から解釈することを明らかにした。最後に、カマラシーラ以外で「限定句」を解説する中観論師としてバーヴィヴェカ (*Bhāviveka*, ca. 500–550)、ジュニャーナガルバ (*Jñānagarbha*, 8 世紀頃)、アヴァローキタヴラタ (*Avalokītavrata*, 8 世紀頃) を取り上げ、カマラシーラに至るまでの「限定句」の解釈の変遷について検討した。各論師に共通する点として、「限定句」を第一義的な勝義と戯論を伴った第二義的な勝義のどちらとしても使用する点、「限定句」の解釈は推論式において使用される第二義的な勝義としての「限定句」を説明する文脈で見られる点が挙げられる。また、「限定句」に対象の側面と

主体の側面という二種類の解釈が見られる点について、主体の側面からの解釈は、バーヴィヴェーカ以来の主要な解釈であることに加えて、「勝義の点で不生」などの表現に対する批判に回答するために利用される。一方で、対象の側面から解釈するのは、不生などの推論式で証明される対象が勝義であることを強調するため、「限定句」を対象の側面から解説する意図がある。そして、対象の側面からの解釈を明確に示すのはカマラシーラからであるため、ここにカマラシーラの「限定句」解釈の特徴がうかがえる。

第4章では、問題点の2点目である、「破有無生」の位置付けについて検討した。まず、先行研究間で位置付けに相違のあるという問題点を解消した。一般的に「破有無生」とされる箇所は、当該論証に加えて、「縁起」に関する論証である「縁起1」「縁起2」、そして勝義として不生である場合に世俗としての生起を拒斥するか否か（以下「拒斥」という4つの主題が見られる。そして、4つの主題に基づく議論は、『中観光明論』においては「破有無生」から展開する一連の議論と考えられる。しかしながら、『真実光明論』を考慮した場合には、「拒斥」といった「破有無生」を展開させた箇所は、必ずしも「破有無生」を前提とする議論ではないということ指摘した。次に、「破有無生」の位置付けを、「金剛片」との関係を中心に検討した。先行研究では、「破有無生」は「金剛片」中の「自身からの生起の否定」（以下「自不生」）に位置付けられる。しかしながら、カマラシーラの著作には「破有無生」を「金剛片」の「自不生」に位置付ける根拠が見られないという点を確認した。さらに、5つの無自性性論証のうちでカマラシーラが世俗の観点で生起を認めているものは、「他者から生起することの否定」（以下「他不生」）の一部、並びにそれと関係する「破四句生」「縁起」である。「破有無生」で中心となる議論が、世俗の点で認められる無の結果が生起することであるため、「破有無生」は「金剛片」中の「他不生」と深く関連する論証であることを明らかにした。また、カマラシーラ以前の中観論師の中で「金剛片」と「破有無生」を関連させるバーヴィヴェーカとチャンドラキールティ (Candrakīrti, 6-7c) を取り上げ、分類の数に相違はあるものの、両者は共通して「破有無生」を「他不生」と関連させることを確認した。

第5章では、カマラシーラの無自性性論証における無常と常住の分類について、問題点の1点目である二段階の論証と関連させて議論した。はじめに、『中観光明論』と『真実光明論』に見られる二段階の論証について考察した。『中観光明論』における二段階の論証は、無常と常住の自性を考察対象として、それを証明する正しい認識手段が存在しないことを示す「破無常常住」と、両方の自性を拒斥する「金剛片」より成ることを確認した。また、『真実光明論』における二段階の論証は、一段階目に認識の問題が含まれる点、二段階目が「金剛片」と常住な存在を否定する論証に分類される点が特徴的であるが、基本的に『中観光明論』におけるものと一致することを確認した。以上のように、論理による無自性性論証では、無常と常住の自性を否定する二段階の論証がカマラシーラの無自性性論証において重要である点を確認した。さらに二段階の論証の起源について検討し、バーヴィヴェーカの著作に見られる無自性性論証と関係のある可能性を検討した。はじめに、カマラシーラの立

場が必ずしもバーヴィヴェーカと同じとは限らないことを明らかにするため、「金剛片」中の「無原因」を取り上げた。バーヴィヴェーカは『般若灯論』で無原因 (ahetu) を悪因 (*kuhetu) と解釈し、それをチャンドラキールティが批判することから、当時からバーヴィヴェーカが無原因を悪因と解釈する点に批判が見られることを確認した。一方で、カマラシーラは無原因を悪因と解釈することに対する批判に回答することではなく、自身で無原因を悪因と解釈することもなかった。そして、カマラシーラの立場は、基本的にはバーヴィヴェーカの見解を継承しながらも、それに対してカマラシーラ自身の解釈を施すと想定しうることを確認した。次に、カマラシーラの二段階の無自性性論証とバーヴィヴェーカの無自性性論証との関係を考察した。『中観心論頌』第3章におけるバーヴィヴェーカの無自性性論証を取り上げ、諸存在を有為と無為とに分けてそれらが自性として存在するのかを検討する一段階目と、「金剛片」によって諸存在の生起を否定する二段階目によってなされることを確認した。最後に、カマラシーラとバーヴィヴェーカの著作に見られる二段階の論証について比較した。両論師の二段階の論証は、一段階目でバーヴィヴェーカは有為と無為、カマラシーラは無常と常住に分類して検討する点、そして二段階目で「金剛片」を使用する点で共通していた。両者の二段階の論証には相違する点も見られるものの、カマラシーラがバーヴィヴェーカの二段階の論証を参考にしたうえで、カマラシーラ独自の無常と常住の自性を否定するための二段階の論証を構成したと想定しうる可能性を指摘した。さらに、カマラシーラの著作において無常と常住の分類がどのように使用されているのかを、教証と5つの無自性性論証の2点から検討した。経典による無自性性論証の点でも、勝義の点で存在するものを無常もしくは常住の自性を持つものに分類されており、どちらの自性もないとするのが正しい般若とされていた。次に5つの無自性性論証について、「金剛片」中の「他不生」が特に重要であることを確認したうえで、「他不生」には共通して無常と常住の分類が利用されることを指摘した。最後に、カマラシーラが無常と常住とを使用する理由として、ダルマキールティが設定する矛盾をカマラシーラは論証に適用する点にあることを指摘した。

本論文により明らかになった、中観派としてのカマラシーラ思想については以下の通りである。まず、「限定句」について、カマラシーラの特徴としてカマラシーラ以前には明確には使用されていなかった対象の側面からの解釈にある。すなわち、論理などによって考察された対象も勝義としてふさわしいことを強調するために、カマラシーラは対象の側面からの解釈を明確に示したと考えられる。次に、無自性性論証について、従来カマラシーラの無自性性論証について扱う際には、カマラシーラ以前の議論を整理したとされる5つの無自性性論証に焦点を当てた研究が大半である。しかしながら、カマラシーラの主著である『中観光明論』、さらに同論書における論理による無自性性論証をまとめた『真実光明論』を考慮した場合には、カマラシーラの論理による無自性性論証は、自性を無常と常住に分類したうえで、「破無常常住」と「金剛片」という二段階の論証により一切法が無自性であると証明するという方法がその中心である。さらに、カマラシーラが無自性性を論証する際には、この無常と常住という分類が重要な観点である。また、この二段階の論証については、

バーヴィヴェーカの無自性性論証から影響を受けた可能性が考えられる。「無原因」の例にも見られるように、カマラシーラはバーヴィヴェーカの無自性性論証をそのまま継承しているわけではなく、バーヴィヴェーカが無自性性を論証する方法を参考にしながら、カマラシーラ独自の解釈を加えるという態度を想定することができる。

以上のことから、中観派としてのカマラシーラの思想的特徴は、「限定句」の解釈から論理によって証明された対象も勝義であることを明確にしたという点、無自性性を論証する際には、特に論理によって証明する際に無常と常住という分類を重要視し、「破無常常住」と「金剛片」より成る二段階の論証を中心とする点、そして、バーヴィヴェーカの無自性性論証を考慮したうえで、カマラシーラ独自の論証を構築する点という 3 点にあると言えるであろう。